

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	尾崎 有飛
------	-------

主な担当科目	ピアノ
--------	-----

2025年の 教育目標・授業に 臨む姿勢	これからのピアノ表現の授業は、2025年度からのセメスター制への移行に伴って、3セメスターでの濃密で効率的な内容へと刷新する。初見演奏課題など授業の素材の多くを新たに用意する。 また、あらたに担当することになった修士課程の合奏特別演習の授業では、ピアノデュオのレパートリー拡充や演奏法の観点だけでなく、アンサンブルや指導の現場で必要な即応力を身につけることも目標とした。
----------------------------	--

2025年の教育に関 する自己評価	授業で使用する初見演奏や移調奏の授業課題の多くを刷新するにあたって、学生個々の能力や興味に細かく合わせることを心掛けた。また同時に、サポートが終了した楽譜作成ソフトFinaleに代わり、学生の多くが使用しているMuseScoreを用いて課題資料を作成することで、PCでの楽譜制作に関しても学生の質問等に対応できるようにした。将来的には課題集としての授業用テキストの作成も視野にいて、作成課題の内容に幅をもたせた。
----------------------	--

2025年のFD活動 に関する自己評価	セメスター制移行にあたり、特に運用が変わる副科ピアノに関して運用方法を取りまとめ、鍵盤楽器部会のFD研修会で説明、またその後も対応を行った。大学全体のFD研修では先生方の講話を伺う中で、大学のこれからの方向性や大学教員としての考え方、在り方を改めて考える機会となった。
------------------------	--

授業改善のために 取り入れた研修内容	大学院の授業をあらたに担当したため、大学院FD研修会で伺った内容を意識して授業にあたった。また、鍵盤楽器部会FD等ではグループでのレッスンにおける現場での様々な状況について情報共有が行われるが、演奏会実習や大学院の合奏特別演習などグループレッスンと共通点の多い授業では、特に学生個々のこれまでの学びが今の学びとうまく結びついているかという点を意識してコミュニケーションをとることに気を配った。
-----------------------	--

2025 年度(秋学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:2802 教員名:尾崎 有飛

1)アンケート結果に対する所見

「ピアノ音楽表現」に関しては、初見演奏や即興演奏、楽曲分析、音楽とその他の分野との結びつきについての考察など、多岐にわたる事柄に取り組んでいる。学生個々の得意分野が多様であることから、ひとつの科目の中で課される課題に対して学修方法も様々になり、その得意不得意の感覚的な点でこの授業の目標の達成度も学生ごとに分かれてくる。しかし、レポートや授業内発表での成果をみるかぎり、実際には実技科目で学修している取り組みに際して授業で取り組んだアプローチを応用できている学生が多いことがわかる。

2)要望への対応・改善方策

「演奏会実習」に関してレッスン回数をより多くしてほしいという要望があった。これについては共演者との都合や全体のプログラムとの兼ね合いによる側面もあるが、3名の担当教員による授業のため、2026年度については、より内容と効率を上げるよう担当日程を調整した。また今後、各回のレッスンの目的をより具体的に意識することで、限られた時間内で何を学ぶかを明確にし、授業外学修としての予習や練習の質を向上することも、授業として取り組む予定である。

3)今後の課題

大学での学びとして、すでに学んだ事柄を様々な事柄へリンクして考察を深め応用すること、また応用の連鎖を実感して次の可能性に対して興味を持つことが非常に重要だと考えている。ディスカッションだけでなくグループワークなども活用することで、様々な視点から各自の演奏に生かしてゆけるように授業を展開する。

複数の科目で、他者の演奏や発表を聴き発言やコメントを書くなど、学生同士でのフィードバックも実施している。その瞬間の意見として発信するだけでなく、どのようなフィードバックが相手にとって有益なアイデアとなるのか等も学修できるように、各回のつながりをさらに持たせてゆく必要があると感じている。演奏に関しては、アドバイスが出来るような聴き方、コメントをする上での要点の掴み方を学び、フィードバック後の演奏の変化にさらにどのようなアプローチが可能かなどを考える時間として内容を発展させる。

またある科目では、レポート課題を廃してプレゼンテーション動画による課題に切り替えている。しかし、文章を構成する思考力だけでなく、活字から情報を読み取ったり伝えたりする経験を繰り返すことで身につくものも大切と考えているため、課題の形態については情報をさらに収集しながら検討を続ける。

以 上